

序：

第六回日本伝道会議では神戸コイノニア（テーブル・ミーティング）が実施されようとしている。伝道会議を単なる会議やコンベンションとしてではなく、参加者の参加意識を高め、参加の意味と意義を与えるものとして、今回の伝道会議の目玉として神戸コイノニア（テーブル・ミーティング）の準備が進められている。神戸コイノニアによって、企画する側にも、参加者にも伝道会議の意味合いが大きく変化する。ただ、どのような変化なのかということ、企画運営する側も参加者にも共通のコンセンサスが必要であろうという認識に立ち今回のペーパーを準備することとなった。

## I 神戸コイノニア（テーブル・ミーティング）の導入の経緯

今回の伝道会議で神戸コイノニア（グループタイム）を導入するきっかけは、2010年のケープタウンでのローザンヌ会議の影響による。ローザンヌ会議でテーブルミーティングに参加した方々から、その良さが伝えられ、ぜひ日本伝道会議でも実施してはどうかという意見が出され、企画されて、具体的な準備が今まで進められて来た。

テーブルミーティングの意味合いを私なりにまとめて見るとするならば、次のようになる。テーブルミーティングにより伝道会議は、会議中心の会議から、人中心の伝道会議への転換を意味する。今までは、プログラムが中心になり、どのようなプログラムを立案、計画し、そこに人が集うことに意義があるとして、テーマが決定され、企画運営された。しかし、参加者の中には、伝道会議に対しての当事者意識を持つことが難しいという側面もあった。今回は、何とか参加者の当事者意識を高められないか、参加者が受け身だけで終わるのではなく、自主的に会議に参加し、お互いに貢献することができる工夫をと考えた結果、神戸コイノニア（テーブルミーティング）が企画された。

今回のテーブルミーティングの準備を始めて、改めて私たちの「交わり」についての考察の必要性を感じた。「交わり」ということばは、聖書の中でも用いられ、教会でも当たり前のようになっている。もう一度、「交わり」を明確に捉えることによって、神戸コイノニアの意義を掘り下げたい。

## II 私たちの交わりの基礎 創造論から

私たち人間は、孤独を恐れている。誰かに受け入れられたい、認めてもらいたいという心理的な欲求を持っている。愛されてこそ、人は育ち、生きることができる。なぜ、私たちはこのような存在なのか？それは、創造主なる神がそのように人を造られたからに他ならない。

創世記1章26・27節では次のように言われている。「神は仰せられた。『さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて。・・・』神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして創造し、男と女とに創造された。」ここで「神はご自身のかたちに似せて、ご自身のかたちとして創造された。」と書かれている。人は神のイメージに似せて造られた。道徳的存在として、霊的存在として、社会的な存在として、様々な部分において、私たち人間は神に似せられた人格的存在、霊的存在として創造された。

人が神に似せて造られた中で、「交わり」の基礎となるのは、神ご自身が「愛」と言われている点であろう。私たちが信じている神は三位一体の神である。一人であると同時に、その中に父なる神、子なるキリスト、そして聖霊なる神が三つの位格をもっておられる。父なる神は子なるキリストと聖霊なる神を愛されており、私たちの救いのために派遣された。一方、子なるキリストも父なる神を愛され、父なる神のみこころに従って、神としてのあり方のすべてを捨てて人となられた。また聖霊なる神も愛なる神として、神の愛を私たちに注いで下さる。神のそれぞれの位格が他を愛するお方として存在している。そこに、神ご自身がご自身のみで交わりをもっておられる。だからこそ、神は愛である。そして、神に似せて造られた私たちも「神を愛し、隣人を愛する」交わりの中に生きるように創造されている。

### Ⅲ 交わりを構築する意識の大切さ

「交わり」に生きるよう創造された私たちは、その一方で墮罪の下にある。アダムとエバが、お互いを愛し合い、支え合う夫婦、家族として創造されたにも関わらず、罪を犯した結果、罪の責任のなすり合い、人が人を力で押さえ込むような関係に変化したとみことばは教えている。(創世記3章8～19節) 神が創造された愛の交わり、お互いが信頼し、助け合うという人間関係を、罪は破壊した。麗しい交わりの形と神の愛に基づく人間関係ではなく、力と人間的な権威に基づいて他人を支配しようとする関係へと、私たち人間の関係性は罪によって大きく変化した。また、墮罪の結果、救われた人々の集まりである教会の中においても、人間関係における様々な課題はつきることがない。だからこそ、私たちはこの問題にキリスト者と真摯に向き合うと共に、主にある交わりについての理解を深め、主イエスの恵みによってキリスト者の交わりを建て上げて行くための努力が必要になっている。

具体的には、伝道会議に参加しても残念なことだが「孤独」を味わって帰る方々がいる。また、新しい出会いを期待しながら、出席してみても、顔見知りの方々と多くの時間を過ごすことは多々見られる。(かく言う前に伝道会議に出席した筆者がそうだった。インマヌエルの人間と多くの時間を過ごし、伝道会議に出席したことで観光で満足した。) よほど自分から積極的に自分の殻を打ち破って周囲の方々にフレンドリーに接して行かなければ、伝道会議であっても「キリスト者にある新しい交わり」を築き上げることが難しい。もちろん出会いは沢山与えられていた。伝道会議側で備えられていたチャンスがあったにも関わらず、その機会を逃してしまっていた残念な自分がいた。同時に、伝道会議を交わりの場と考えず、出会いを「交わり」まで育てようとする意識の低さが根底にあった。

この意識改革を行わなければ、同じ事の繰り返しは伝道会議においても延々と続くこととなる。「交わり」を構築するには、一緒に過ごす「場」と「時間」、そして、お互いを思う「心」(愛)が必要である。キリスト者であっても、主にある「交わり」を建て上げて行こうとする積極的な意志が私たちの間に求められているのではなかろうか。

### Ⅳ 「交わり」の基盤 御霊の「交わり」

罪によって破壊された私たちの「交わり」ではあるが、それを回復するのがキリストの十字架の贖いである。同時に、みことばによれば、私たち「人」の交わり、特にキリスト者には同じものを持っているが故に、「交わり」の土台が与えられている。それをみことばは「御霊による一致」という言葉で表現している。(エペソ4章3節)

「交わり」は同じ何かを人が共有し、共感し合い、そして力を合わせて同じ目的を達成するために、何かに取り組みながら、深められてゆく人格的な営みだと定義することができるのではないか。そうすれば、信仰者の交わりは「御霊の一致」を土台として、まず同じものを確認することによって、強められる。それらは「からだは一つ、御霊は一つです。あなたがたが召されたとき、召しのもたらした望みが一つであったのと同じです。主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つです。すべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのもののうちにおられる、すべてのものの父なる神は一つです。」(エペソ4章4～6節) という信仰的な共通項を確認し、同じ主を礼拝していることにより、御霊によって与えられる霊的な一致、一体感であると言えるのではないだろうか。

実際に、「交わり」と訳されるギリシャ語のコイノニア(κοινωνία)という言葉が聖書の中に見てみると、単に一緒にいるという以上の意味があることが分かる。使徒2章42節では、ペンテコステの日、ペテロの説教によって、悔い改め、キリストを信じ、バプテスマを受けた弟子たちが、「彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた。」と書かれている。ここでの「交わり」(コイノニア)は単に一緒にいて、交流があるというより、ともに霊的な営み(礼拝)に参加するという意味合いが濃いとされている。(“Fellowship” from The New International Dictionary of New Testament Theology ed. Colin Brown vol.1 p.639) 共に主イエスを見上げ、父なる神を礼拝する心がキリスト者の「交わり」の基礎となる。そこに「御霊の一致」も与えられ、私たちの交わりの「土台」がしっかりと据え

られていることをまず確認することができる。

## V 交わりの中身

キリスト者の交わりとは何かということを考える時、「御霊の一致」に基づく交わりとするなら、同じ信仰者として、キリストにある兄弟姉妹との間に成立するもの定義することが良いように思われる。とすればキリスト者の交わりの中身は「兄弟愛」だと言えるのではないか。

キリストの身体としてキリストにあって結びつけられたお互いが、「御霊によって注がれる神の愛」によって、「兄弟愛」の実践として、教会におけるキリスト者の交わりがある。ペテロの手紙では、「あなたがたは、真理に従うことによって、たましいを清め、偽りのない兄弟愛を抱くようになったのですが、互いに心から熱く愛し合いなさい。」(Iペテロ 1章 22節)と勧められている。土台となっているのは、キリストの十字架の贖罪によって、罪がきよめられ、偽りが取り去られて、兄弟愛が与えられていることである。それを実践して、相互に心を込めて愛し合う、兄弟愛を言葉と行動に表すようにと語られている。具体的には、お互いをキリストの愛によって受け入れ、互いの罪を赦し、お互いの霊的な建て上げのために励まし合い、祈り合い、また、お互いがお互いに霊的にも実際的に支え合うことにより、交わりが実のあるものとなってゆくことである。

伝道会議において、神戸コイノニアは「交わり」を通して「兄弟愛」を意識しながら、実践し行く場を提供することになる。見知らぬ者同士が、様々な教会の違いや神学や文化的な相違、また感受性の多様性などの相違点を強調するのではなく、キリストにある信仰と救いを土台として、恵みによって、一つとなってゆくことを目的として集まるなら、そこには大きな変化が起こり得る。互いに関心を持ち、互いを受容し、互いを励まし合い、互いに霊的に建て上げることに取り組むことができれば、そのグループの霊的な交わりは人格的な大きく良い影響を互いに及ぼし合うものとなる。それこそが、伝道会議の中身となり得るのではなからうか。これは主イエスの喜ばれることであり、主の御心にかなうことではないだろうか。

それを参加者が伝道会議から各々の地域教会に持ち帰ることが出来れば、目に見えるキリストの身体である教会が建て上げられ、さらに地域教会の枠を越えて、公同の教会が建て上げられて行く可能性が広がって行くことを捉えたい。

## VI 交わりの方向性 外に向かって、主の使命を果たすために

キリスト者の「交わり」の内実が「兄弟愛」だとするなら、「交わり」は「交わり」で終わるものでなく、外に向かって進んで行くものではなからうか。ペテロの手紙には次のように書かれている。「敬虔には兄弟愛を、兄弟愛には愛を加えなさい。」(IIペテロ 1章 7節) 兄弟愛は外に向かって開かれており、まだ福音を知らない人々への愛、隣人愛へとつながっている。この点において、伝道会議の神戸コイノニア(テーブルグループ)も内向きに互いに関心を持ち、受容し、祈り、愛しあうところがゴールではなく、そこから互いに力を合わせ、主イエスが愛している、この世の人々へと向かって行かなければならない。

主は私たちキリスト者が「教会の中の交わり」で留まるのではなく、使命として、出て行く事を命じられた。福音の中心はキリストの十字架と復活である。それにより私たちは「救い」を体験し、その「救い」の喜びと平安を味わいつつ、主の力と恵みにより聖霊に強められて、キリストの福音を世に伝えてゆくことが求められている。もし、恵みを自分たちのために、教会の中だけに用いることで終わってしまうなら、それは主の御心とご計画にかなっていないと言えるのだろうか。

パウロはコイノニアということばを使って、次のような表現をしている。「キリストの苦しみにあずかる(κοινωνία)こと知って」(ピリピ 3章 10節) 文脈はパウロが自らについて語っている場所である。そこで、パウロはキリストの苦しみのコイノニアに入っていると告白している。ピリピの町での迫害を思い返し、自分は宣教のために福音の苦しみを担っ

ているというパウロの告白がある。そして、ここには自分の十字架を背負ってわたしについて来なさいと言われた主イエスのことばのエコーを聞くことが出来るのではなかろうか。主イエスの十字架の後を追い、その苦難を共に味わう。それはとりもなおさず他の人々の救いのため。福音宣教のためであるとパウロは言う。そしてこの後、パウロは「私はしばしばあなたがたに言って来たし、今も涙をもって言うのですが、多くの人々がキリストの十字架の敵として歩んでいるからです。」(ピリピ3章18節)と言っている。ここから読み取る事ができるのは、パウロの滅びに向かっている人々への「愛」であり、その救いのためには十字架の苦難さえも主とともに味わうのだという彼の覚悟である。

私たちの伝道会議の神戸コイノニア「交わり」の方向性のモデルがここにあるのではないだろうか。日本の伝道は困難と言われ続けている。だからこそ、私たち日本のキリスト者は、主イエスのために「キリストの苦しみとともにあずかる」コイノニアに積極的に参加し、福音のために共に祈り、力を合わせ、苦しみさえも共に担って行くことができるなら、どんなに幸いであろうか。そして、そのスタート地点として伝道会議の神戸コイノニア(テーブルミーティング)を位置づけることができる。

## Ⅶ 最後に

キリスト者が集まる所、「交わり」の存在するところには、主の臨在の約束が与えられている。主イエスご自身が「二人でも、三人でもわたしの名において集まるところには、わたしもそこにいる。」(マタイ18章20節)と約束された。それ故、この地上で、キリスト者が集まる所には、キリストの臨在がある。キリスト者の交わりには主の臨在という大きな祝福があることが分かる。しかし、それだけではない。この節の直前では、「あなたがたのうちのふたりが、どんな事でも、地上において心を一つにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。」(マタイ18章19節)と書かれている。キリスト者が集まって、心を合わせて祈る時、父なる神は私たちの祈りを聞き、祈りに応えて主の業を行って下さる。それが主のこの約束である。祈りの内容に関しては、何を祈ることが求められているのだろうか。みこころにかなうならどのような祈りでも制限無くというのが、この節だけを見た解釈となるであろう。しかし、18章全体を俯瞰すると、また違った光景が浮かび上がって来る。マタイ18章1~10節では、小さい者をつまづかせないように、見下げたりしないようにという警戒が書かれている。その後、ひつじの例えを通して、小さい者のひとりが滅びることは父のみこころではないとされている。(11~14節)そして、兄弟が罪を犯した時の対処が書かれている。(15~20節)兄弟を赦すことについてのペテロの質問と例えが書かれている。(21~35節)これらを読むならば、罪によって滅びに向かっている小さい者たち、罪を犯した兄弟などの小さな存在のために祈ることが、20節の祈りの内容として理解することが出来る。つまり失われた兄弟、滅び行く人々のために愛に基づいた執りなしの祈りをささげる時にこそ主がご臨在され、祈りと聞いて、働いて下さるのである。

隣人を愛する愛から生まれて来る、滅び行く人々のためにキリスト者が集まり、祈る場にこそ、主イエスはともにいて下さる。そして、これこそが日本伝道会議の真の目的となると感じるのは筆者だけではないと思う。そのような集まりこそ、主イエスは喜び、ともにいて、執りなして、私たちが主の証し人として立つことができる聖霊を与えて下さると信仰に立たせて頂きたい。そして、伝道会議から「コイノニア」交わりの体験を、地域教会に持ち帰って行く時、主はそれぞれの地域教会の交わりと伝道を祝して下さると信じる事ができる。

第6回日本伝道会議において、神戸コイノニア(テーブルグループ)は単なる小グループセッションではない。キリストにある兄弟愛を土台にした「交わり」の時となり、主イエスのために力をあわせて行く仲間造りの場となり得る。また、そこから、伝道のための祈りのグループの始まりとなり、日本のリバイバルの火種となるような取り組みとなり得ることを覚える。

ここにこそ、この営みを伝道会議において計画し、進めて行く意味と意義を見いだすことが出来るのではないだろうか。